東海大學日本語文學系紀要
多元文化交流 vol.2 2010年6月

〈特集:「移動の時代」と街・人・街づくり〉

三世代におけるモンゴル民族の子どもの頃の生活変容に関する研究

―中国・内モンゴル自治区を事例として―

姬茹

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

周知のように、現在の中国は飛躍的な発展を続けている。都市化の波は大都市に留まらず、辺境地域である内モンゴル自治区にも及んでいる。内モンゴルはモンゴル民族の自治区であり、悠久の歴史・文化を持つモンゴル民族が比較的集中して居住している地域である。

モンゴル民族は、長い間昔ながらの草原で遊牧生活を営んできた。このような生活の知恵から生まれた「ゲル」[注1)]「オルティンドー」[注2)]「モンゴル相撲」「シャーガ遊び」[注3)]等はモンゴル民族の伝統的な文化である。しかし、17世紀頃から農耕化が進み始め、1980年以降は中国政府の市場経済導入による家畜の私有化、牧畜民の一層の定住化[1)]、近年の都市化[2)]等の影響により、生活の基盤である住居形態はゲルから固定家屋に変化し、使用する言語や普段着等、様々な日常生活面にも変化[3)4)5)]がみられるようになった。また、2006年に「新農村新牧区建設」の中で、農村・牧畜区における工業化と城鎮化の進行を加速するため、農牧業の産業化“三化”戦略[注4)]が推進された。これは、牧畜区・農村において、さらに一層の都市化の進行を図るものである。

中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活はこの間大きく変貌し続け、その中で生活水準の向上が見られる。一方、モンゴル民族の固有の文化・生活は希薄になりつつあり、現代社会に適応しつつもモンゴル民族の文化の継承・発展に対する方策を探ることは急務の課題と考える。そのための第一歩として生活変化の実態把握に取り組んだ。

特に、子どもの生活環境の変貌は著しい。民族文化の継承には子どもの頃が重要な時期であるため、子どもの時代に焦点を当てた。本研究は内モンゴルのモンゴル民族三世代にわたってそれぞれの世代ごとに子どもの頃の生活実態を把握し、この間の急激な都市化の進展・社会の変化に伴って子どもの生活が三世代でどう変化したかを明らかにすることを目的とする。

1-2.　本研究の位置づけ

本研究では、子どもの生活における民族の文化の継承・分断状況を三世代を通してみることにより、変化をもたらした要因や変化内容と変化の方向がより鮮明に把握できると考えた。

これまで日本では三世代における子どもの遊びの変化を捉えた研究が存在する[6)7)]。中国国内においては、中国の留守児童の生活実態[8)]や子どもの遊びの実態等[9)~12)]の研究がある。しかし、いずれも三世代で比較検討したものではなく、三世代における子どもの頃の生活の変容をみる本研究とは異なる。

本稿では、まず普段の一日の生活時間、普段着、参加する祭り、日常の親の手伝いなどにわたる生活の変化を分析した(2章)。次に、小学校通学状況や通学仲間等、小学生の生活の変化を分析する(3章)。さらに、三世代の子ども時代の評価について分析する(4章)。最後に子どもの生活における三世代間の変化について、モンゴル民族の伝統的なくらし・文化の中にあった子育て力、生活文化の継承という視点から考察する。子どもの発達支援や遊び環境整備を進めていく上で、モンゴル民族の伝統的なくらし・文化の中にあった子育て力・生活文化の継承をどう考えればよいのか、今後の課題を整理する(第5章)。

1-3.　調査概要

内蒙古大学蒙古学学院の大学生を対象とし、アンケート調査を実施した。蒙古学学院の学生は90%以上がモンゴル民族であるためである。内蒙古大学は1957年、中華人民共和国の成立後、少数民族地域において最初に創立された総合的な大学である。蒙古学学院に在籍している800人の大学生に対し、夏休みの直前(2007年7月)に調査票を配布し、夏休み期間中の帰省の際、調査票を実家に持ち帰り、父母と祖父母の調査を大学生が聞き取りしながら調査票に記入する方式を用いた。大学生調査は直接本人記入による。新学期が始まる時(2007年9月)に大学を通じて回収した。

調査票は、各世代に800部を配布した。回収数(有効回答調査表)は大学生世代327(40.9%)部、父母世代299(37.4%)部、祖父母世代231(28.9%)部である。

アンケート調査票は、大学生本人、父母世代、祖父母世代と3種類である。本調査は大学生本人、父母世代、祖父母世代のいずれも子ども時代(小学校年齢:約6～13歳を中心とした)の遊びと生活に対する調査である。アンケート調査票は、記入式、選択式で回答を求める方法を用いた。調査項目は表1の通りである。

なお、クロス集計を行い、χ^2検定において有意水準p＜0.001、p＜0.01、p＜0.05で関連性がある場合は、それぞれ表中や図に***、**、*で表記する。

各々世代が子どもであった年代は、大学生世代1992～1999年頃、父母世代1965～1972年頃、祖父母世代1940～1947年頃と類推できる。さらに、祖父母世代の親が仕事をしていた年代は1920年前後と考えられる。1920～1947年は戦争・内乱等で社会が不安定な状況にあり、人々は精神的に不安な上、衣食も不足する生活を送っていた。建国後、国民経済を回復するため、一連の政策や運動が実施されたが、中には誤りもあり、人々が安定した社会のもとで衣食が足りる生活になるまでに時間がかかった。そして、改革開放の実施が中国の転換点となり、経済高度発展の今に繋がった。本研究と関連する時代の背景を理解するために約90年にわたる戦争、内乱、社会構造の変化等の大きな出来事を表2に示す。

1-4.　回答者の概要

回答者の概要をみると(表3)、大学生は男111人、女198人、父母世代は男201人、女68人、祖父母世代は男94人、女121となっており、平均年齢はそれぞれ21歳、48歳、73歳である。居住地をみると、三世代の大半は牧畜業や農業を中心とした地域である「ガチャ内[注5)]」や「ソム内[注6)]」(以下、ガチャとソムを非都市的地域と称す)に居住している。官庁や事務所、商業施設が集中している中心地域があり、人口が集中している都市である「市内」又は「市」に準じる「鎮[注7)]内」と「旗[注8)]内」(以下、市、鎮、旗を都市的地域と称す)での居住は、父母世代と祖父母世代とも2割未満であるが、大学生世代では3割弱と若干増えている。親の職業では、祖父母世代は「牧畜業[注9)]」と「農業」が中心であり、父母世代(大学生の現祖父母)になって、これまでの中心である「牧畜業」と「農業」以外に「公務員・教員」の職が8.6%増えている。大学生世代(現父母)では「牧畜業(35.2%)」「農業(35.5%)」が減少し、労働者(「公務員・教員」「その他会社員」)が増えて(36.1%)三分の一ずつとなっている。

表1　調査項目

	調査項目	大学生	父母世代	祖父母世代
普段の生活	起床･就寝時間	■	■	■
	家庭内の使用言語(SA)	●	●	●
	普段着(MA)	●	●	●
	居住形態(MA)	●	●	●
	日常での父母の手伝い(MA)	●	●	●
	参加する祭り･行事(MA)	●	●	●
小学校	小学校通学状況(SA)	△	●	●
	小学校の地域(SA)	●	▲	▲
	他地域の小学校に通った理由(MA)	●	▲	▲
	通学の相手(MA)	●	▲	▲
	小学校に通っていたところの住まい(MA)	●	▲	▲
	家に帰る頻度(SA)	●	▲	▲
	塾･習い事に通う状況(SA)	●	●	●
	塾･習い事の内容(MA)	▲	▲	▲
生活評価	一番時間を費やした事(MA)	●	●	●
	思い切り遊んでいた(SA)	◆	◆	◆
	勉強ができた(SA)	◆	◆	◆
	家族と一緒に暮らせてよかった(SA)	◆	◆	◆
	経済的に苦しかった(SA)	◆	◆	◆

注：■記入式　●選択式　△非該当　▲該当の場合、選択式　◆5段階評価
SA(単数回答)　MA(複数回答)

表2　年表[13)14)]

	西暦	出来事
祖父母世代	1937～1945	日中戦争
	1947	内蒙古自治区成立
	1949	中華人民共和国成立
	1950～1952	国民経済回復時期
	1953～1956	新民主主義から社会主義への移行
父母時代	1957～1966	大規模な社会主義建設の時期
	1958	人民公社設立
	1958～1961	大躍進運動
	1963	内蒙古自治区牧畜区に学校を設立方案の試行
	1966～1976	文化大革命
	1978	改革開放
	1980	人民公社（家畜の公有化）
	1981	家畜の私有化
	1990	牧地使用の個人化
大学生世代	1992	社会主義市場経済の確立
	1993	農業賞、37項目の農民負担金を廃止
	2000	中共15期3中全会、「西部大開発」の戦略始動 生態移民政策実施　「退耕還林（草）」条例公布 「囲封転移」戦略

表3　回答者の概要

			大学生		父母		祖父母	
			n	%	n	%	n	%
			n=309		n=269		n=215	
性別	男		111	35.9	201	74.7	94	43.8
	女		198	64.1	68	25.3	121	56.3
平均年齢（歳）			21		48		73	
			n=324		n=289		n=193	
居住地	市内		18	5.6	6	2.1	4	2.1
	鎮内		38	11.7	20	6.9	10	5.2
	旗内		42	13.0	15	5.2	10	5.2
	ソム内		104	32.1	71	24.6	35	18.1
	ガチャ内		132	40.7	183	63.3	135	69.9
			n=324		n=291		n=201	
親の職業	牧畜業		114	35.2	146	50.2	113	56.2
	農業		115	35.5	127	43.6	89	44.3
	労働者	自営業	10	3.1	1	0.3	2	1.0
		公務員・教員	101	31.2	38	13.1	9	4.5
		その他会社員	16	4.9	2	0.7	2	1.0
		臨時雇用	4	1.2	-	-	2	1.0
	退職		1	0.3	-	-	1	0.5
	無職		1	0.3	2	0.7	2	1.0
	その他		2	0.6	-	-	2	1.0

［不明を除く］、居住地と親の職業は複数回答

2.　普段の生活について

2-1.　起床・就寝時間

普段の起床･就寝時間についてたずねた(表4)。起床の平均時間は、父母世代が一番早く(5時20分)、次に祖父母世代(5時40分)で、大学生世代は6時30分である。就寝の平均時間は、大学生世代と父母世代が同じく21時10分で、祖父母世代が20時である。

2-2.　家庭内の使用言語

三世代とも子どもの頃に、家庭内で使用していた言語は「モンゴル語のみ」が最多で7割以上である。「モンゴル語と中国語両方使用」していたのは、大学生世代が25.5%と一番高く、次いで、父母世代が20.4%であり、祖父母世代は11.8%である(図1)。祖父母世代から父母、大学生世代になるにつれ、「モンゴル語のみ」が減少し、「モンゴル語と中国語両方使用」が増加している。さらに、大学生世代の親の職業からみると(表5)、両方使用しているのは農業と労働者

とも45%を超えているが、牧畜業では18.8%である。

2-3.　普段着

普段着として「モンゴル衣装」の着用状況をみる(図2)。洋服との両方着用も含めると祖父母世代では半数が着用し、父母世代でも約4割が着用していたが、大学生世代では普段着でのモンゴル衣装着用は激減し(0.9%)、両方着用でも2割未満に減少した。一方で、「洋服」の着用は祖父母世代から大学生世代までの間に大幅増加した。三世代別に親の職業が牧畜業でモンゴル衣装の着用率をみると(表6)、祖父母・父母世代の着用率は高かったが、大学生世代では牧畜業でもわずかとなった。

2-4.　居住形態

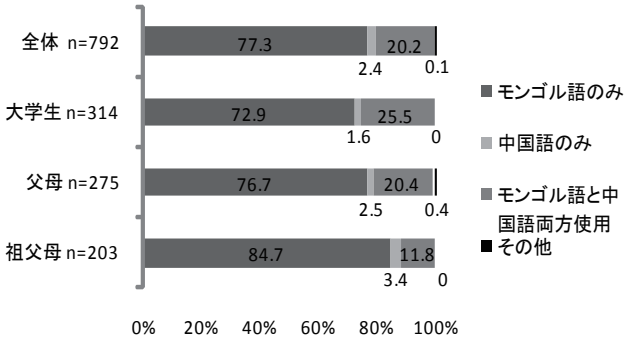
三世代を通して「土造平屋」が主たる住居形態であり、祖父母世代6割、父母世代7割、大学生世代では5割である。モンゴル民族の伝統的な住居である「ゲル」での居住は、祖父母世代が一番高い割合を占め、次いで父母世代、大学生世代では1割未満まで減少している。一方、「レンガ造平屋」は祖父母世代から次第に増加し、大学生世代では高い割合となった(図3)。また、都市生活の住居を代表する「集合住宅」も大学生世代で増加がみられる。

2-5.　日常での父母の手伝い

「日常的な親の仕事を手伝っていた」、「日常生活でみられる伝統的なことを手伝っていた[注10)]」や「日常的にきょうだいの面倒をみていた」は大学生世代より祖父母世代と父母世代がよくしていた(図4)。大学生世代は「日常的な家事をしていた」が最も高い割合に対し、父母・祖父母世代は「日常的な親の仕事を手伝っていた」となっている。

表4　起床・就寝の時間

	大学生		父母		祖父母	
	起床時間 N=293	就寝時間 N=296	起床時間 N=245	就寝時間 N=246	起床時間 N=189	就寝時間 N=190
平均	6:30	21:10	5:20	21:10	5:40	20.00
標準偏差	0.8	0.9	1.0	1.1	1.0	1.1
最大値	9:00	24:00	9:00	24:00	9:00	24:00
最小値	4:00	18:00	3:00	19:00	3:00	18:00



［不明を除く］〈単数回答〉　χ^2検定:［**］p＜0.01

図1　家庭内で使用する言語

表5　親の職業別による「モンゴル語と中国語両方使用」

	牧畜業	農業	労働者			
			自営業	公務員・教員	その他会社員	臨時雇用
全体 n=157	22.9	56.7	3.2	26.1	3.8	0.6
大学生 n=80	18.8	46.3	5.0	41.3	7.5	1.3
父母 n=54	27.8	66.7	−	14.8	−	−
祖父母 n=23	26.1	69.6	4.3	−	−	−
χ^2検定		[*]		[***]	[*]	

［不明を除く］〈複数回答〉単位:%(横%)

表6　親の職業が牧畜業での普段着としてのモンゴル衣装着用率

	モンゴル衣装	洋服	モンゴル衣装と洋服両方着用していた	その他
全体 n=350	20.0	44.9	38.6	3.1
大学生 n=109	1.8	65.1	30.3	4.6
父母 n=137	21.2	43.8	43.1	2.2
祖父母 n=104	37.5	25.0	41.3	2.9
χ^2検定	[***]	[***]		

［不明を除く］〈複数回答〉単位:%(横%)

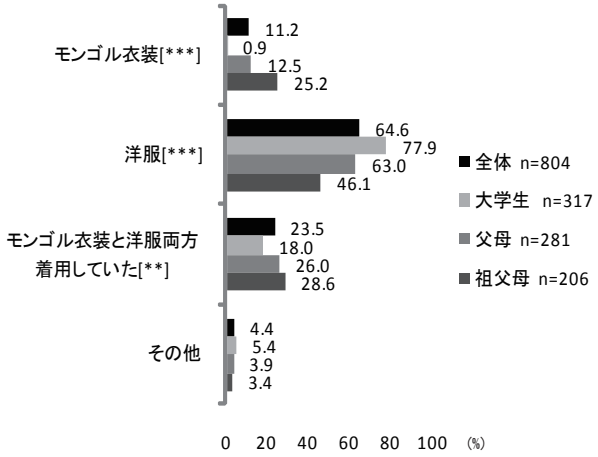


図2　普段着

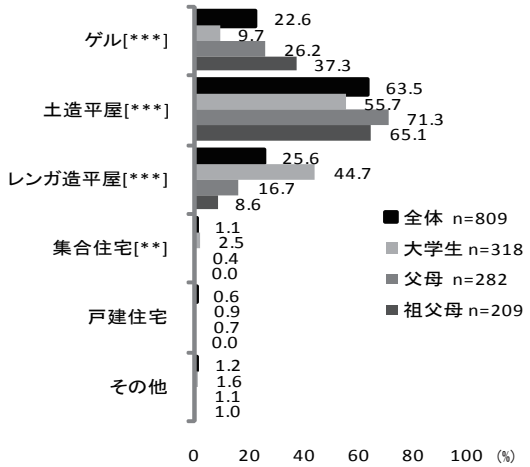


図3　居住形態

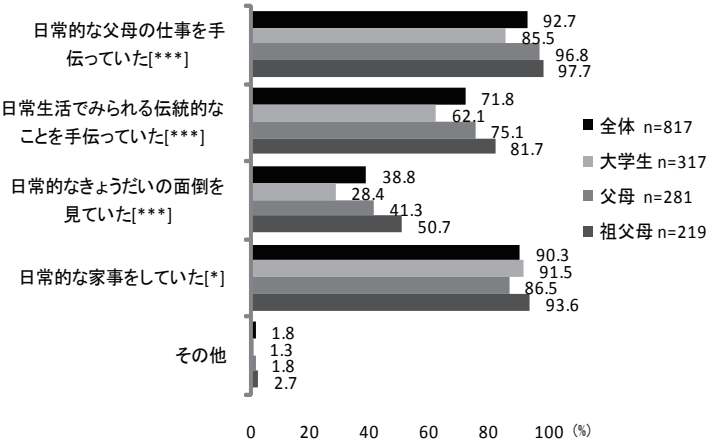


図4　日常で父母を手伝う事

注：図2, 図3, 図4は［不明を除く］〈複数回答〉

2-6.　参加する祭り・行事

子どもの頃に参加したことがある祭りでは、三世代のいずれも規模が一番大きな「ナーダム[注11)]」が一番多い(図5)。宗教的な祭りの「オボー[注12)]」、「火の祭り[注13)]」、東北部地域の祭りである「祭尚西[注14)]」「招福[注15)]」が祖父母世代、父母世代、大学生世代の順で、減少している。また、家庭を中心とした行事である「高齢者の祝い」は家族の中で伝承され、世代間で変わらずに行われている。「子どもの祝い」は大学生世代までは増加がみられた。

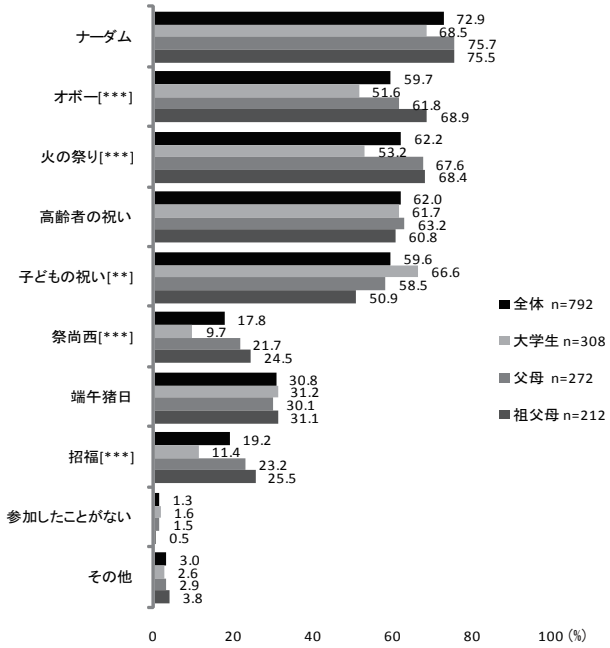


図5　参加したことがある祭り･行事

［不明を除く］〈複数回答〉

また、都市的地域に居住している大学生世代の伝統的な祭りや行事の参加状況を親の職業別でみる(表7)と、「ナーダム」「オボー」「火の祭り」「高齢者の祝い」「子どもの祝い」のいずれも公務員･教員では4割以上を占めている。全体の参加状況(約6～7割)よりは低いものの、都市的地域で牧畜業でない家庭でも地域の祭りに関わりを持っていることがうかがえる。

表7　都市的地域に居住･親の職業別大学生世代の祭り･行事の参加状況

		全体 n=98	ナーダム n=66	オボー n=54	火の祭り n=52	高齢者の祝い n=53	子どもの祝い n=64	祭尚西 n=2	端午猪日 n=21	招福 n=17
牧畜業 n=26		26.5	34.8	40.7	40.4	32.1	29.7	−	23.8	41.2
農業 n=20		20.4	13.6	13.0	15.4	18.9	17.2	50.0	33.3	−
労働者	自営業 n=9	9.2	6.1	7.4	5.8	7.5	6.3	−	14.3	−
	公務員･教員 n=44	44.9	47.0	42.6	40.4	43.4	43.8	50.0	38.1	58.8
	その他会社員 n=7	7.1	10.6	9.3	11.5	11.3	6.3	−	4.8	−
	臨時雇用 n=4	4.1	3.0	3.7	1.9	7.5	4.7	−	−	−
退職		1.0	1.5	1.9	1.9	1.9	−	−	−	−
無職		−	−	−	−	−	−	−	−	−

［不明を除く］〈複数回答〉単位:%(縦%)

3.　小学校について

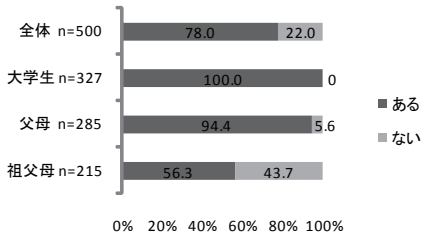
現在の子どもの生活をみると、多くの時間を学校で過ごしている。しかし、父母世代、特に祖父母世代はその時代の影響を受け、小学校教育を受けられなかった人も少なくない。建国前は、内モンゴル地域では、高等教育が空白であり、小学校すら、118万km^{2}の範囲に3,769箇所しかなく、在校生は総人数の3.92%で、90%以上は非識字者であった。1947年に内モンゴル自治区が成立し、教育を重視し始めた。2003年までに在校生が全自治区総人数の16.5%となり、自治区内の全地域にわたり小学校教育が普及し、9年義務教育が69.9%に達した[13)]。

3-1.　小学校通学状況

小学校就学率をみると祖父母世代は56.3%で、父母世代は94.4%である。祖父母世代は4割が小学校教育を受けていない(図6)。どこにある小学校へ通っているかをみると(図7)自分が住んでいた地域の小学校に通っている比率は、三世代とも9割以上である。一方、他地域の小学校に通った人はその理由として、祖父母世代と父母世代が「小学校がなかった」、大学生世代は「言語の勉強がよい」「教育の質が高い」等の要因を挙げていた(表8)。

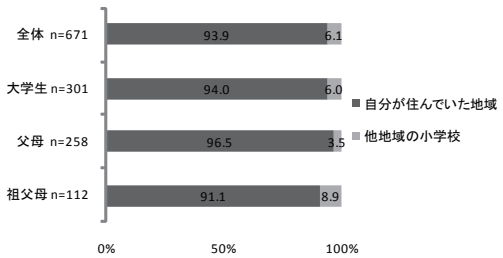
3-2.　通学の相手

学校に誰と通学しているかをみると、三世代とも「友達と通っていた」が最も高い割合を占め、次いで「1人で通っていた」となっている。祖父母及びその他親戚等が送迎していたのは、大学生世代になるにつれやや高くなる傾向がみられる(図8)。



[不明を除く]〈単数回答〉 $\chi 2$検定:[***]p＜0.001

図6　小学校へ通う状況



[不明を除く]〈複数回答〉 χ^2検定において有意差なし

図7　通っていた小学校

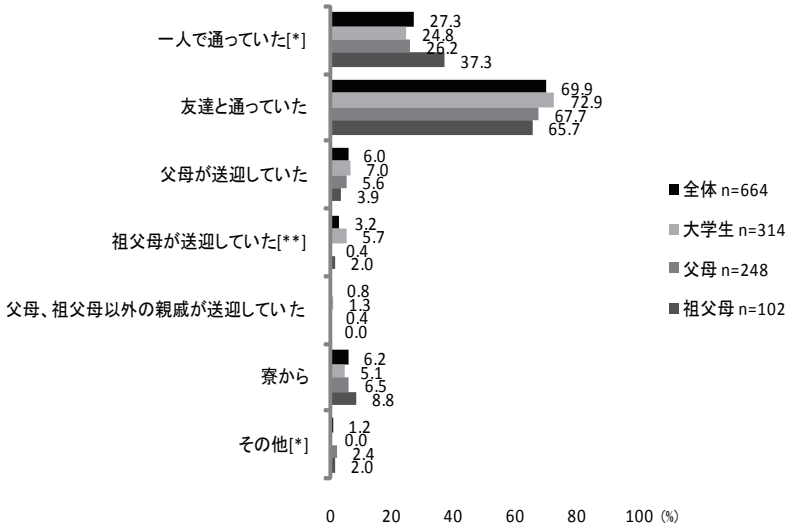


図8　通学の相手

［不明を除く］〈複数回答〉

表8　他地域の小学校に通った理由

		住んでいる地域に小学校がなかった	教育質がよい	言語の勉強がよい	その他
全体 n=49	n	18	18	19	3
	%	36.7	36.7	38.8	6.1
大学生 n=24	n	4	9	14	3
	%	16.7	37.5	58.3	12.5
父母 n=14	n	9	5	2	–
	%	64.3	35.7	14.3	–
祖父母 n=11	n	5	4	3	–
	%	45.5	36.4	27.3	–
χ^2検定		[*]		[*]	

［不明を除く］〈複数回答〉

3-3.　小学校に通っていたときの住まい

三世代とも、小学校に「家から通っていた」が圧倒的に多かった(図9)。わずかではあるが祖父母･父母世代より大学生世代に「父母と借家に住んで通っていた」「祖父母と借家に住んで通っていた」「親戚の家に住んでいた」の割合が高い。

3-4.　家に帰る頻度

自宅以外に学生寮や親戚の家に居住し、小学校に通学している子どもたちは、どのくらいの頻度で家に帰っていたかをたずねた(図10)。三世代とも「週に一回」の高い頻度で自宅に帰るのが4割前後であり、「学校の連休しか帰っていなかった」は3割前後を占める。

3-5.　塾・習い事

祖父母世代と父母世代は、小学校教育すら普及していなかった時代であり、塾・習い事の人数がわずかである。大学生世代になると約2割まで増えている(表9)。塾・習い事の内容は(表10)、父母・祖父母世代では「モンゴル語」「中国語」といった言語の勉強であったが、大学生世代では「英語」への関心が高まり、さらに「楽器」、「美術」、「習字」などがみられる。

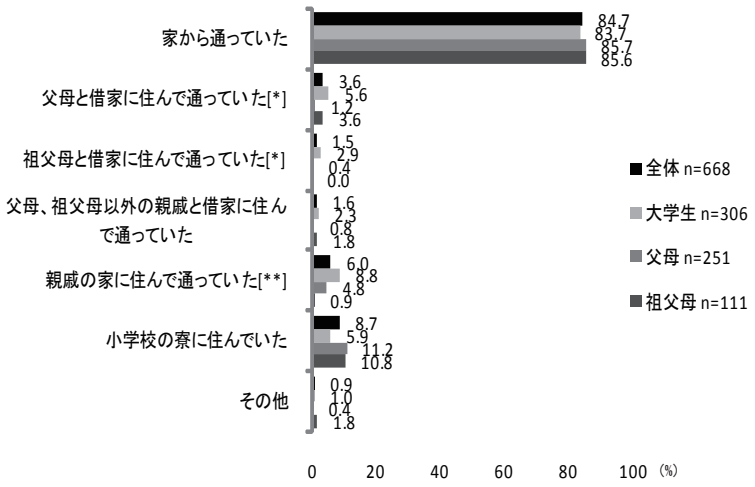
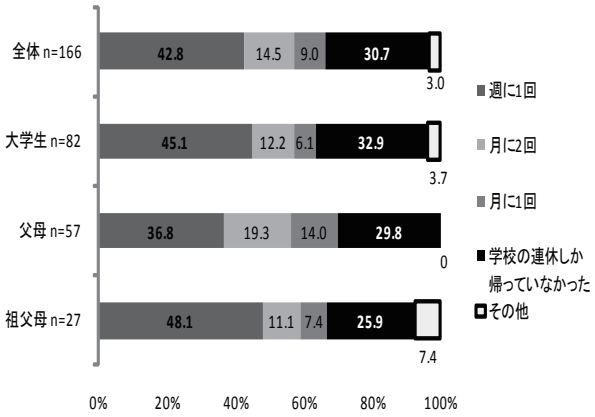


図9　小学校に通っていたときの住まい

［不明を除く］〈複数回答〉



［不明を除く］〈単数回答〉χ^2検定において有意差なし

図10　実家に帰る頻度

表9　塾･習い事

塾・習い事	全体 n=786		大学生 N=317		父母世 N=271		祖父母 N=198	
	n	%	n	%	n	%	n	%
通っている	72	9.2	62	19.6	8	3.0	2	1.0
通っていない	714	90.8	255	80.4	263	97.0	196	99.0

［不明を除く］〈単数回答〉 χ^2検定:[***]p＜0.001

表10　塾･習い事の内容

	大学生(実数) n=61	父母(実数) n=9	祖父母(実数) n=2	χ^2検定
モンゴル語	12	5	2	
中国語	8	3	−	
英語	33	2	−	
数学	26	4	−	
作文	8	2	1	
楽器	12	−	−	[**]
声楽	9	1	−	
舞踊	10	1	1	
美術	14	−	−	
スポーツ	2	1	−	
習字	4	−	−	
その他	2	−	−	

［不明を除く］〈複数回答〉

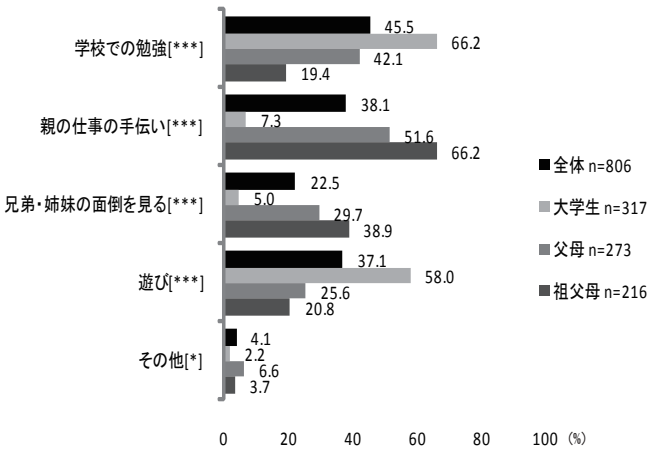
4.　子どもの頃の生活に対する評価

4-1.　一番時間を費やした事

子どもの頃に一番時間を費やした事では、祖父母と父母世代は「親の仕事の手伝い」が過半数を超えて1位に対し、大学生は1割もない。大学生世代の1位は「学校での勉強」66.2%であり、2位は「遊び」58.0%で、他世代と比べて大幅に増加している(図11)。祖父母世代と父母世代間の大きな差は「学校での勉強」が父母で増えたことであり、「親の仕事の手伝い」、「兄弟・姉妹の面倒を見る」は父母世代になってやや減り、「遊び」は少し増えた。祖父母世代と父母世代は「親の仕事の手伝い」に一番時間を費やしており、あまり「遊び」をしていない。大学生世代では家事手伝いが9割であったが、それに費やす時間は祖父母・父母世代と違って少なく、「学校での勉強」と「遊び」に多くの時間を費やしている。

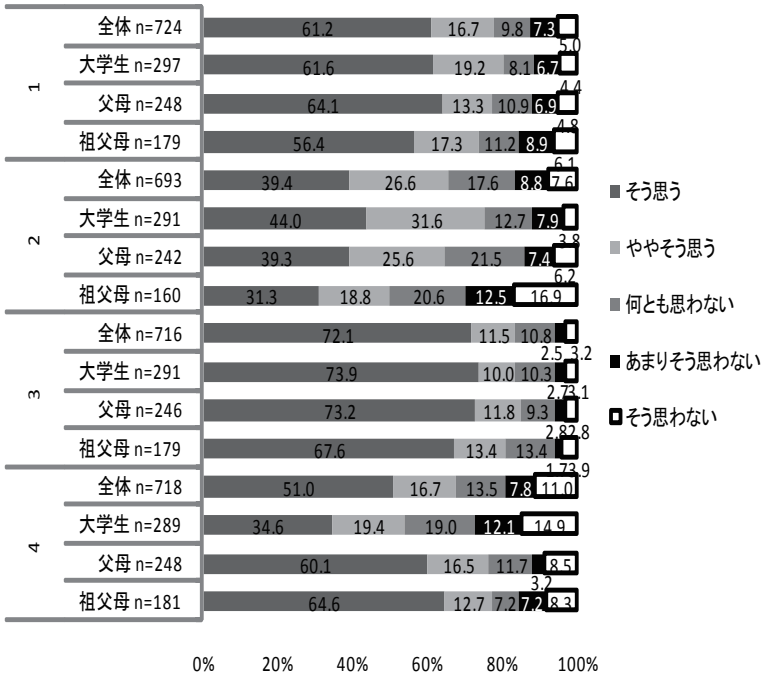
4-2.　子どもの頃の生活に対する評価

三世代に子どもの頃の遊び、勉強、家族と一緒のくらし、経済状態に対し、5段階の評価をしてもらった(図12)。「思いきり遊んでいた」と思うのが一番多いのは父母世代で、大学生世代も6割を超えており、祖父母世代も56.4%である。祖父母・父母世代では時間をお手伝いに費やしていても、遊ぶときは思い切り遊んでいたことがうかがえる。「勉強ができた」は、大学生世代では義務教育が普及したにもかかわらず、「そう思う」割合が44%、父母世代は39%、祖父母世代は31%である。「家族と一緒にくらしてよかった」は、三世代とも高い割合(7割前後)を占め、そう思わない人はわずかである。「経済的に苦しかった」は祖父母世代が一番高い割合(64.6%)を占め、父母世代も60.1%に達し、大学生になると約3割まで減少している。



［不明を除く］〈複数回答〉

図11　一番時間を費やした事



1 思いきり遊んでいた　　2 勉強ができた[***]

3 家族と一緒に暮らせてよかった　4 経済的に苦しかった[***]

図12　子どもの頃の生活に対する評価

5. おわりに

三世代にわたる子どもの頃の普段の生活や祭り参加等の実態調査を行った。その結果、世代間に現れた子どもの生活変化は都市的地域でのくらし・居住の増加と牧畜業の減少がもたらしている側面が大であること、しかしそれだけではないこともわかった。三世代にわたる変化の内容を、モンゴル民族の伝統的なくらし・文化の中にあった子育て力、生活文化の継承という視点から考察し、合わせて今後の課題に触れる。

① 社会構造、就労制度、教育制度などの変化を受け、大学生世代になるほど都市的地域で暮らす人が増加し、並びに親の職業に労働者が増加した。

② モンゴル民族固有の言語や衣装、ゲル、伝統遊び、民族の祭り等は牧畜業のくらしに伴うものであるが、三世代の経過につれ牧畜業は減少し、それにより前述のモンゴル民族固有のものが減少する傾向が明らかになった。住居はほとんど固定家屋となり、モンゴル衣装は牧畜業であっても大学生世代ではすでに普段着ではなくなった。しかし、家庭での使用言語をみると中国語のみの使用は少なく、モンゴル語と中国語両方使用を加えればほとんどの家庭でモンゴル語を使用している。固有の言語の使用は基本的な民族の子育て力であり、固有の言語を通じて伝承されることは多いと言ってよいだろう。大学生世代では牧畜業の減少と都市的地域でのくらし・居住の増加の影響で両方使用が増えている。今後、両方使用の増加が予想され、それに伴って家庭でのモンゴル言語使用がどの程度になるか、混乱しない言語環境をどう提供できるかが課題であろう。

③ 起床・就寝時間にやや変化がみられるが、子どもの生活リズムは問題ない範囲だったといえる。日常生活では父母の仕事や家事手伝いをする生活が祖父母・父母世代までは普通であり、それが家庭の子育て力であったといえる。大学生世代でも手伝いをする率が非常に高いが、時間は少ししか費やしていないことから、手伝いは伝統的なくらしのなかの知恵として家庭のしつけとして伝えられているのではないかと推測される。このまま推移すればいずれお手伝いのない生活になることも予測される。一方、家族と一緒に暮らすことに対する評価は三世代通じて高く、家族のつながりは厚い。こうした絆は、子どもの親の仕事や家事を手伝う生活が減少しているが、子どもの祝いや高齢者の祝いという家族の絆を大切にする行事として受け継がれていると思われる。

④ 伝統的な祭りへの参加状況は大学生世代で減少している。また、同じ大学生世代のなか

では都市的地域に居住する学生、親が労働者である学生の参加率が低い。

⑤　大学生世代は、義務教育法[16)]の施行後6年経過した時期であるため、前世代と違ってみなが小学校に通える状況となった。また、大学生世代で塾・習い事に通う子どもが増加し、親の教育関心も高まっている。今後も子どもに対する小学校からの影響は強くなり、そこでの取り組みや方針は重要なものになるだろう。

今後もさらなる変化が予測される。都市化の進展と、牧畜業の減少のなかでは民族の独自性を維持しにくいが、民族の伝統的なくらし・文化の持っている子育て力を生かす重要性に気づき、それを家庭や地域、学校で継承する方策を立てることが今後の課題となろう。また、本調査は大学生を対象とした検討であり、条件が整えばあらゆる年齢層、地域に対する調査検討を行いたい。さらに、中国国内のほかの少数民族との比較、ほかの遊牧民族との比較なども今後の課題としたい。

（Yaru　奈良女子大学人間文化研究科　特任助教）

注

注1）ゲル（モンゴル語）はモンゴル民族の伝統的な移動式天幕住居であり、本稿では天幕住居を指す。

注2）モンゴル族の民謡であり、モンゴル長調（中国語訳）とも称する。

注3）シャーガ（モンゴル語）は、羊や牛などのくるぶしの骨のことである。牧畜の生産力が向上し、家畜の数が増えた。これにより生活が豊かになり、生活において娯楽が求められ、シャーガ遊びをするようになったという。シャーガ遊びは牧畜民の生活の知恵からうまれた遊びであり、モンゴル族の生活文化の独自性を象徴している。遊び方法は多様であり、地域によって異なる。

注4）［党委　政府文件］、“内蒙古党委、政府推進社会主義新農村新牧区建設実施意見”、内党発（2006）

注5）ガチャ（モンゴル語）は内モンゴル自治区の行政単位で，村に相当する。1950～80年代には生産大隊と呼ばれている。中国語の表記は「嘎查」である。

注6）ソム（モンゴル語）は内モンゴル自治区の行政単位で郷に相当する。1950～80年代には人民公社と呼ばれていた。中国語の表記は「苏木」である。

注7）鎮は県の下の行政単位であり、比較的大きな町。

注8）旗は内モンゴル自治区の行政単位で、県級行政区に相当する。旗と同レベルの行政区として，

「県」,「市(旗・県級市)」がある。

注9)牧畜業は、羊、牛等の家畜の飼養を生業としている。

注10)日常生活でみられる伝統的なこととは、モンゴル民族の衣食住生活において、伝統的な食事の調理法である「羊の解体・調理」、「乳製品作り」、「モンゴル民族服作り」、伝統的な住居である「ゲルの組み立て」のことを指す。

注11)ナーダム(モンゴル語)は規模が一番大きい伝統的な祭りである。

注12)オボー(モンゴル語)は自然石を積み重ねる形で造営されており、毎年行われるモンゴル民族の伝統的、宗教的な行事。

注13)火の祭り:モンゴル族の習俗であり、地域により異なる。例:竈神を拝む。参考文献15)p.1063

注14)祭尚西:モンゴル民族の東部地域での祭祀の習俗である。参考文献15)p.1062

注15)招福:ホルチンの牧畜区地域での春を祭る習俗である。3月に行われることが多い。参考文献15)p.1063

参考文献

1)児玉香菜子:中国社会主義市場経済下におけるモンゴル民族牧畜民の社会経済的動態,砂漠研究13-1,pp.60-80,2003

2)小長谷有紀:定住化過程におけるモンゴル民族の牧畜経営－錫林浩特(シリンホト)市内の事例から,佐々木信彰編:現代中国の民族と経済,世界思想社,pp.185-207,2001

3)野村理恵・今井範子他:シリンゴル盟の移民村における牧畜民の生活様態―中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその変化(第1報)―,奈良女子大学家政学研究,Vol.54No.1,pp35-45,2007

4)黒﨑未侑・今井範子他:シリンゴル盟における固定家屋に住む牧畜民の生活様態―中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその変化(第2報)―,奈良女子大学家政学研究,Vol.54No.1,pp46-53,2007

5)姪茹・今井範子他:シリンゴル盟の都市部と都市近郊におけるモンゴル民族の生活様態―中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその変化(第3報)―,奈良女子大学家政学研究,Vol.54No.1,pp54-61,2007

6)木下勇:三世代への聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容～児童の遊びを通してみ

た農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究　その2 ,日本建築学会計画系論文報告集 Vol.431,pp.83-92,1993.8

7)米山貴浩･大津星砂他:3世代調査からみるあそび環境の調査～テレビ普及･テレビゲーム普及に着目して～,日本建築学会大会学術講演梗概集,pp.27-28,2007.8

8)段成栄･周福林:我国留守児童状況研究,人口研究,Vol.29,No.1,pp.29-36,2005

9)李宇宏,徐紹民:城市児童遊戯場空間構成研究,新建築,1999(06)

10)白雪峰:内モンゴルホルチン地方における子供の遊び方の変容について,モンゴル研究,第20号,pp.4-19,2002

11)姫茹･中山徹･室﨑生子･上野勝代:中国･内モンゴルにおける居住環境からみた子どもの屋外遊び場に関する研究,―中国･内モンゴル呼和浩特市の新･旧住宅区を事例として―,奈良女子大学家政学研究,Vol.53 No.1,pp42-51,2006

12) 姫茹･中山徹･室﨑生子:子どもの戸外遊びの実態と遊びに対する子どもと保護者の意識―中国･内モンゴル呼和浩特市の小学校を事例として―,日本家政学会誌,Vol.59 No.10,pp.837-846,2008

13) 陶健主編:内蒙古区情,内蒙古人民出版社,2006

14) 内蒙古自治区畜牧庁修志編史委員会編:内蒙古畜業大事記,内蒙古人民出版社

15) 文精主編:蒙古族大辞典,内蒙古人民出版社,2004

16) 中華人民共和国義務教育法、新華書店、2006,7